

●今号から各界で活躍されている方をお招きしたインタビューを連載します。

音楽の喜びを 一人でも多くの人と 分かち合いたい

ゲスト◎チェロ演奏家・指揮者

マリオ・ブルネロ氏

いつも身近にあった音楽を、
人々に語りかける言葉として

—音楽を志したきっかけ、なかでもチェロを選んだ理由はなんですか？

音楽好きの両親がいつもレコードをかけているような家で、音楽はずっと身近な存在でした。でも、両親には私を音楽家にしたいという気はなく、7歳の時に町の小さな音楽学校でギターを習い始めた時も、両親は何か楽器ができれば楽しいだろうと考えただけだっ

たそうです。

私が育ったカステルフランコという町は人口3万人ほどの小さな町で、音楽学校にはピアノやギター、フルートなどはあっても、チェロなんてありませんでした。先生はアコーディオンもクラリネットもなんでもできる人でしたが、その先生に習い始めてすぐに「きみの楽器はギターじゃないよ。チェロだ」と言われました。私のチェリストとしての才能を最初に見出してくれた人ですね。本物のチェロとの出会いは、12歳の時です。町に大きな音楽院の出先機関のような場所ができて、若くて才

能のあるチェリストが教師としてやってきたので習うことになったのです。しかし、ただの田舎町のお稽古感覚だったので、チェロを初めて見た時も、大きな楽器だと思っただけで、それよりも先生の目が大きくて、ちょっと威圧されたことの方をよく覚えています。

その後、まもなく17歳になるという時にベネツィアの音楽院への進学を決めた理由も、音楽に真剣に取り組んでいたからでも、プロを目指すつもりでもなく、ただ都会に行けることが魅力だったからです(笑)。

—— プロを目指すようになった理由とチェロの魅力をお聞かせください。

あるとき、先生からヒンデミットのソナタを課題曲として与えられました。難解で最後まで弾きこなすだけで精一杯で、「こんなものを楽しんで聴く人がどこにいるんだろう」と思っていました。ところが、チェロを持って舞台に立つと、たくさんの人がいて、「ああ、この人たちは僕の演奏を聴きにきているんだ」と思い知ったのです。そして、わかりやすい曲ではないにもかかわらず、自分の弾いている音楽が相手に語りかけている、自分の「言葉」が相手に通じているという感覚を知りました。そのときの衝撃はいまだに忘れられません。チェロという楽器が私の言葉になると確信した瞬間でした。当時はまだ音楽学校の5年生でしたが、そうして何年も続けるうちに、熱意や才能など、いろいろなものが混ざり合い、少しずつプロとしての方向性が見えるようになったのです。

チェロに限らず、楽器にはそれぞれの魅力があると思います。私は、チェロという楽器向けに書かれた曲に、派手な見せ物的要素が少なく、語りかけるような深みのあるものが多いということにまず惹かれました。また、ピアノなら手の先だけ、笛なら唇だけなのに比べて、チェロという木製の大きな楽器は、胸にその楽器を抱くので、楽器の響きが自分の体を通して響き渡るといふ、独特な感覚にも惹かれました。

音楽すべてにおいて、常に誠実であること

—— 「チェロが自分の言葉になる」とはどういうことか、もう少し詳しく教えてください。

演奏は作曲家が書いた素晴らしい作品を、聴く人々



に伝えること。ちょうど教会の司祭が、聖書の言葉を何度も繰り返し人々に語りかけるのと同じだと思います。

作曲家の思いを再現するためには、作曲家自身のこと、曲作りに関するエピソードや作曲家の生きた時代背景といった知識を得ることが大前提です。例えば、2007年10月に紀尾井ホールで行った紀尾井シンフォニエッタ東京第61回定期演奏会では、武満徹氏(※)の「三つの映画音楽」という作品を演奏するにあたり、いきなり作品を自分の感覚でとらえるのではなく、最初にベースとなる映画を観ながら、武満氏がどのような音をどのような場面につけたかのかを考えました。

それは、そのまま事実を忠実に再現するという意味ではありません。事実をきちんと自分の後ろに背負った上で、どう伝えたらいいのか悩みに悩んで、聴く人に曲の持つ物語を語りかけるのが演奏だと思います。そして、そこには演奏家の人格や経験が現れます。それが、演奏家によって生じるバリエーションや解釈なのです。

つまり演奏家の仕事とは、好き勝手にやることでも、写真のように再現することでもなく、その曲の持つ歴史から作曲家の心理まで、知り得ることのできるすべてを、自分の持っている絵筆を使い、自分の色で描くことなのです。

大切なのは、曲、作曲家、楽器などすべてに対して敬意を払い、心から理解しようとする誠実な姿勢です。その作曲家が300年前の人であろうと、100年前の人であろうと、また2日前に作られた曲であっても、それは変わりません。

—— 指揮者としてもご活躍ですね。指揮者になった理由と、演奏者との違いを教えてください。

プロフィール

1960年イタリアのヴェネト州カステルフランコ生まれ。86年、イタリア人として初めて第8回チャイコフスキー国際コンクール優勝および批評家特別賞、聴衆賞を受賞。その後、アバド、チョン・ミンフン、ゲルギエフ、小澤征爾ら著名な指揮者と共演し、現在、世界一流の指揮者や演奏家から共演を望まれる世界屈指のチェリストとして活躍。初来日は87年の第3回<東京の夏>音楽祭出演の際。2000年以降は毎年来日し、NHK交響楽団、サハロフ、アフナシエフ、小山実稚恵、ルゲシーニらと共演し好評を博している。近年は指揮活動も活発で、02~04年にはパドヴァ歌劇場管弦楽団音楽監督を務めた。紀尾井シンフォニエッタ東京(KST)とは01年に初共演。03年にライブ録音された演奏がビクターエンタテインメントからリリースされ、04年の第20回<東京の夏>音楽祭のオープニングコンサートでは自ら主宰するオーケストラ・ダルキ・イタリアーナとKSTの合同演奏を指揮して絶賛される。06年にはKST定期演奏会だけでなく東北公演に同行指揮者として参加し、各地で熱狂的な成功を収める。現在使用している楽器は、以前フランコ・ロッジが使用していた17世紀製作の「マッジョーニ」。

※武満 徹(たけみつとおる 1930年—1996年):クラシック音楽作曲家。現代音楽の分野において世界的にその名を知られ、フランス芸術文化勲章、NHK放送文化賞など数多くの受賞歴を持つ日本を代表する作曲家。映画に限らず演劇、テレビ番組の音楽も手がけた。



紀尾井シフォニエッタ東京を指揮するプルネロ氏

実は、指揮の勉強は全くしたことがありません。私はイタリアに「オーケストラ・ダルキ・イタリアーナ」という弦楽だけのオーケストラグループを持っているのですが、当初はみんなと一緒に演奏だけしていましたが、ところが、「そうじゃなくて、もっとこうしたい」などの思いを仲間に伝えようとしても、チェロを弾きながらだとなかなか上手くいかない。そのうちチェロを置いて身ぶり手ぶりを交えて一生懸命に伝えるようになりました。音楽の世界にみんなと同化したい、みんなと一緒に良い物を作りたいという一心だったのですが、いつの間にか指揮をしていました（笑）。

演奏との違いは、聴衆にダイレクトに自分の言葉を伝えるのではなく、まず演奏家に伝えなくてはならないことですね。演奏家が私の思いを納得していなければ、聴衆が納得する形で語ることはできません。そのためには、まず、指揮者と演奏者、お互いの信頼が何よりも大事だと思います。そして次に、どこに到達したいかという共通の意識を持つことです。

信頼関係があって、一緒に良い物を作りたいという思いがあれば、とても熱く素晴らしいコンサートができるのです。

紀尾井シフォニエッタ東京ならではの魅力と互いの信頼関係

—— 紀尾井シフォニエッタ東京とはとても相性が良いと伺っています。

実は、練習の時からメンバーときちんとコミュニケーションがとれて、お互いが納得して演奏ができるということは、とても難しいことです。でも紀尾井シフォニエッタ東京（以下KST）とは、それが理想的な形でできます。多分、物の考え方が似ているのでしょう。最初に彼らと会ったときにも、私が「音楽が楽しいんだよ」「演奏することがこんなに好きなんだ」と表現すると即座に理解して反応がありました。

私は、KSTに高度な技術や正確な演奏だけを求めてはいません。私という、異国の風を取り入れ、「こんな表現も楽しい」「こんな解釈も楽しめる」と感じてほしいのです。その思いを彼らはとても敏感に受け取り、よりのびのびと、音楽の楽しい部分を表現してくれます。それが私と彼らの結びつきの一番重要なところであり、大切にしていることです。

また、このオーケストラの特徴は、メンバーがほとんど固定していること、そしてその規模と紀尾井ホールのバランスが良いことです。年に5、6回、定期演奏会のために集まる彼らは、ものすごい集中力を発揮します。私が何か望めば、彼らは最大限の力で叶えようとしてくれるのです。そのエネルギーというのは、年間100回も



岩手公演の様子（釜石文化会館でゲネプロを見学する子どもたち）



の公演がある通常のオーケストラでは考えられません。
——2006年に岩手公演をされた際には、公開ゲネプロ（※）や地元の子どもたちへの直接指導もされています。広く音楽を楽しんでもらうこと、音楽家を育成することについてどのようにお考えですか。

2006年の岩手公演では、本当に楽しく素晴らしい経験ができました。私は、オーケストラはもっと外へ出なくては行けないと、いつも考えています。「演奏を聴いて良かった」と思わせるだけではなく、音楽の持つ本質的な美しさや喜び、芸術が持つ力をわかってもらうためにも、岩手の子どもたちと同様のふれあいを、すべてのオーケストラがやるべきだと考えています。

教育については、40人の子どもに直接指導するよりも、200人の子どもに自分たちの演奏を聴いてもらう中で、より音楽を身近に感じてもらえないかと考えています。例えば、オーケストラの演奏会の練習は一般的に誰も立ち入りできませんが、それは無人の部屋で灯りをつけているようなものです。練習開始早々や演奏会直前の集中力が必要な時は別としても、普段の練習風景を公開し、子どもたちが好きな時に訪れることができるような仕組みを作りたいと思っています。音楽を作り出していく過程や現場の雰囲気には、学ぶことがたくさんあり、とても有意義なものなのです。

また、例えば毎週決まった曜日に私が家で弾きたい曲を弾き、聴きたい人はインターネットにアクセスすれば聴くことができる、というようなシステムも作りたいですね。今は、何か聴きたいと思ったら、何か月も待つコンサート会場に足を運ばなくては行けません。しかし、これからの時代には、もっと気軽に聴いてもらえるような、より多くの人に向けたコンテンツを提供することが必要です。それによって、新たな裾野が広がり、生演奏を聴きに来る人も増えると思います。

——今後の目標と、日本の聴衆に向けてメッセージをお願いします。

2009年は、KSTを連れてイタリア・スペイン公演をする予定です。私はKSTから人との信頼関係や音楽を

やる喜びなど、いろいろなものをもらいました。今度はそれらを引っさげて、ヨーロッパへ行きたいのです。

ヨーロッパでは、日本のオーケストラはテクニックはあるが、それ以上の“何か”がないと思われがちです。しかし、KSTによって「とんでもない」と伝えたいのです。日本のオーケストラの水準はここまでできていて、ヨーロッパのオーケストラとなんら遜色ないどころか、あなた方を凌駕しているんだと実際に思わせたいのです。

KSTメンバーも皆、目の輝きが違います。日本の演奏家がヨーロッパで、しかも自分のオーケストラで演奏できるということに対する熱意や想いの強さを感じます。ですから私も、このプロジェクト実現に向けて、最大限の努力を惜しまないつもりです。

できることなら、日本のお客様も連れて行きたいですね。ラテン系の観客の歓喜で盛り上がるイタリア、スペインのコンサートの雰囲気を、KSTメンバーにはもちろん、日本人の多くの方々に感じていただきたいのです。

音楽は水や空気のように天から与えられたもの。この喜びをみんなで分かち合いたいと思います。

OMC Card Classic Special マリオ・ブルネロ 魂のバロック

音楽のバイブル

バッハ 「無伴奏チェロ組曲」全曲&ヴィヴァルディの名作

公演概要

日 時：第1日 2008年11月21日(金)午後7時開演
第2日 2008年11月23日(祝・日)午後3時開演

会 場：紀尾井ホール

出 演：マリオ・ブルネロ(チェロ)

ブルネロ・バロック・エクスペリエンス(*ヴィヴァルディ作品のみ出演)

主 催：(財)新日鉄文化財団 協 賛：(株)オーエムシーカード

チケット料金：S席5,500円 A席3,500円 2公演セット(S席のみ)9,000円

前売開始日：2公演セット券 5月24日(土)、1公演のみ 6月7日(土)

チケット販売：紀尾井ホールチケットセンター(TEL.03-3237-0061)、

ぴあ、イープラス(<http://eplus.jp/>)

※ゲネプロ：ゲネラルプローベ(General probe[独])の略。舞台上で本番の進行通りに行われる最終確認のリハーサル(通し稽古)のこと。